



# 本が私を呼んでいる

古川 聡

本を巡る世界が揺れている。二〇一〇年は電子書籍元年と呼ばれ、iPadやKindleといった電子媒体で本を読む技が黒船のごとく押し寄せ、紙媒体の従来型書籍を凌駕しかねない勢いである。多くの人がその流れに乗り遅れまいと、家電量販店に駆け込み、黒船を手中に収めようとしている。本とのつきあい方が変わりつつあることを物語る光景であろう。

図書館が抱えている悩みの一つに蔵書の保管がある。紙媒体の書籍は重くかさばる。いつでも利用でき背表紙が見えて、取り出しやすいように立てて置かれることが必要だ。が、所蔵スペースは限られ、一方で出版される本は増加の一途をたどる。このような問題を電子書籍は一気に解決してくれる可能性を持つている。事実、スタンフォード大学では蔵書の八五%をなくして本のない図書館を目指すという。私は週に数回は書店に立ち寄る。しかも、通勤の途中駅、自宅の近く、仕事で出かけた先など、数カ所の書店に行く。趣味の雑誌コーナーを見るだけでなく、どのような本が売れているかをチェックし、本の表紙のデザインやタイトルにおもしろいものがないかなども見て回る。書店によって置いてある本が異なるので、複数の書店に行かなければならない。少なくとも家族にはそのような言い訳をする。そうして少しでも気になる本があれば買ってしまおうので、自宅は本の山と化す。これがすべて電子書籍に置き換えられたら、部屋は片付き、本の重さで家が傾く心配も消える。「またこんな本、買ってきたの」と家族から揶揄されることも少なくなる。この軽量の媒体には数千冊の本が入り、しかもいつでもどこでも

読みたい時に読める。夢の図書館でもあり、持ち歩き可能な書齋ともいえるであろう。

しかし、電子書籍にはどうしてもなじめない自分がある。家電量販店で手に取ってはみても、購入しようという気にならない。書店のあの雰囲気、本のあの匂い、ページをめくる時のあの感触。どれ一つを取っても、電子書籍にはない。同じような変化がかつて辞書で起こった。その結果、今や学生のほとんどは、電子辞書で言葉の意味を調べている。辞書を何冊も持ち歩かずに済み、簡単な操作ですぐに意味がわかる優れものである。だが、紙媒体を使わないことで失ったものは大きいのではないだろうか。

私は何冊か本を出版したことがある。今年の一月には教育心理学の本を出したが、\*タイトル、表紙のデザインにはかなりエネルギーを注いだ。タイトルにインパクトがあつたり、表紙が魅力的であつたりすれば、読者が手に取る確率が高まる。タイトルの字体も重要な要素だ。何しろ手に取って読んでもらわなければ、本を書いた意味がない。本は内容だけでなく外観も著者の自己主張である。その自己主張に共感したり反発したりしつつ、読者は本を選ぶ。

書店を訪れるのは、読書へのプロローグ。あてどなく書棚の間を歩き回りながら、手に取るように私を呼んでいる本を探す。これこそが書店を訪れ、紙媒体の本と出会う醍醐味ではないだろうか。これからの本は、電子書籍化して学問に貢献する本と、読者との偶然の出会いを求めて紙媒体のまま自己主張する本に二極化していくであろう。上手な使い分けを考えながら、私は今日も書店を歩き回る。

●ふるかわ さとし 本学教授（幼児教育学・教育心理）

\*『教育心理学をきわめる10のチカラ』（請求記号●J119-455）

古川先生のインタビュー記事（ばらんど265号）もあわせてお読み下さい。